日本大学
大学史ニュース
2024.07
Vol.27
日本大学広報部広報課（大学史）

目次

◇芦屋市打出と山田顕義　―清風・亦介・顕義―　…… 2
◇「太平洋戦争」下の日本大学第一中学校配属将校　…… 4
◇「佐賀の乱」の史跡を巡る　…… 5
◇昭和初期の東京獣医学校卒業アルバムと冨澤恵　…… 6
◇『国会議員百首』に描かれた山田顕義　…… 7



富田砕花旧居にある展示室（兵庫県芦屋市）

富田砕花（1890–1984）は、短歌や校歌などを多く手がけた詩人。明治45年（1912）に日本大学商科附属殖民科修了。大正10年（1921）より芦屋に居住し、死後、遺品・居宅などが芦屋市に寄贈されました。富田砕花旧居は昭和14年から93歳で亡くなるまで暮らした場所で、昭和９年から11年には、谷崎潤一郎が三番目の妻、松子夫人とともに隠れ住んだ場所でもあります。

◆芦屋市打出と山田顕義　―清風・亦介・顕義―



歩道と車道の間にある旧防潮堤（芦屋市浜町）

兵庫県芦屋市に打出（うちで）という地域があります（阪神電鉄「打出駅」付近）。戊辰戦争の発端となる鳥羽伏見の戦いの際、山田顕義率いる長州藩諸隊が三田尻（現・山口県防府市）から船でこの地域にある打出浜に上陸しました。昭和40年代に埋め立て開発が進んだため、現在の海岸線は、幕末当時の面影をほとんど残していません。

この打出は、江戸後期から幕末にかけて、長州藩とつながりのある地域でした。そして、この地域と長州藩を結ぶ場面には、いつも顕義の親族が関わっています。今回は学祖・山田顕義やその親族が関わった打出地域を取り上げていきます。



旧防潮堤付近にある浜戎社

顕義の大伯父である村田四郎左衛門清風（せいふう）（1783–1855）は、長州藩の藩政改革を推進した人物として有名です。長州藩の多大な借財返済のため、倹約の徹底、四白（紙、蝋、米、塩）増産の奨励、下関の諸国貨物に貸し付ける越荷方（こしにがた）の拡充などに取り組みました。教育面では、藩校明倫館の移転、拡充に貢献し、また、対外的危機意識の高まりから海防にも力を尽くしました。

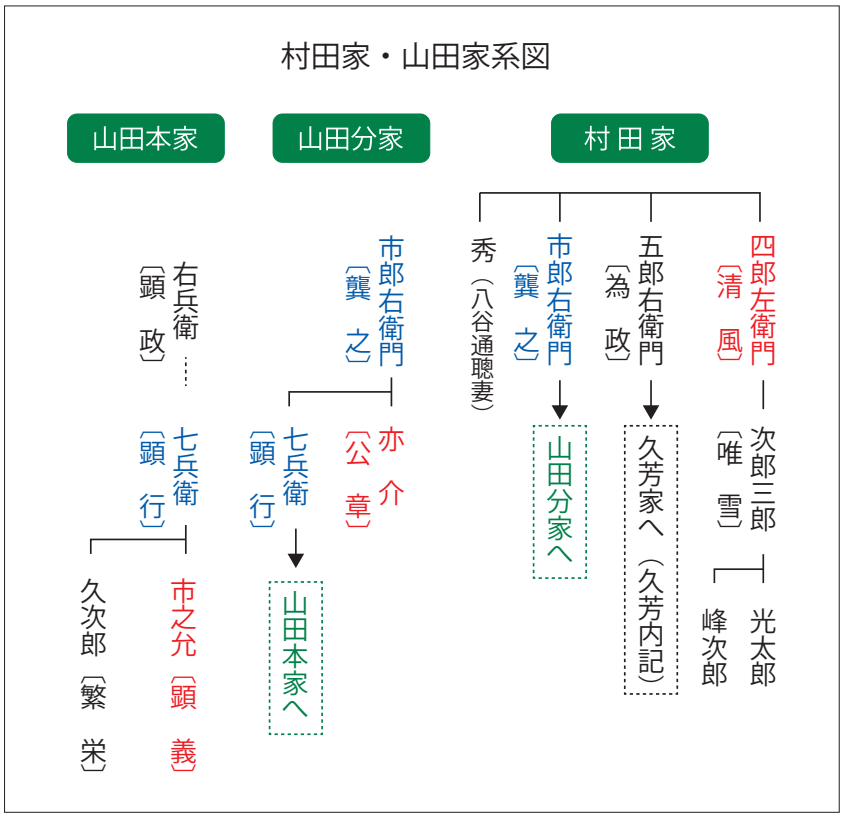
文化７（1810）年、清風は長州藩の右筆役（ゆうひつ）となり、密用方（みつようかた）勤務を命じられます。密用方とは、先例や儀式、毛利家の系図・系譜などの調査を担当する部署です。清風は、毛利家の遠祖である大江広元（1148–1225）や阿保親王（あぼ）（792–842）について藩主から意見を求められ、墓所の調査にあたります。毛利家の先祖が大江氏で、さらにその先祖が在原業平の父で平城天皇の皇子である阿保親王であると考えられていたことから、長州藩では藩祖毛利元就らとともに顕彰していくこととなりました。

文政元（1818）年、江戸から萩へ帰国する途中、清風は奈良、大阪、兵庫に点在する阿保親王史跡を調査します。その結果、清風は打出の「阿保親王塚古墳」を阿保親王廟とし、文政６年墓所の改修が完了します。この後、長州藩は、参勤交代時に打出の阿保親王廟へ名代を派遣し、さらには関係者への御目見などを行いました（岸本覚「長州藩藩祖廟の形成」）。打出村は明和６（1769）年から幕府の直轄地でしたが、この長州藩による毛利家遠祖廟参詣は、打出地域の人々に長州藩を強く印象付けました。

山田亦介（またすけ）公章（1808–1864）は、清風の甥にあたります。清風の弟である市郎右衛門龍之が山田家に養子に入りますが、その長男が亦介で、次男が顕義の父である七兵衛顕行です。亦介は吉田松陰に長沼流兵学を教授した人物で、洋学にも造詣が深く、長州藩の軍制改革責任者として洋式海軍の創設などに尽力しました。

この亦介も清風と同様、天保10（1839）年、右筆役、密用方勤務となります。嘉永６（1853）年、ペリーの浦賀来航後、長州藩は大森海岸、後に相州海岸（神奈川県）警備を幕府から命じられます。安政５（1858）年６月、長州藩は兵庫海岸警備を幕府から命じられたため、９月、亦介は陣屋の設置場所調査のため兵庫に赴きました。亦介の調査を踏まえ、長州藩は５カ所の陣屋地を幕府に願い出て、万延元（1860）年10月、打出村と東須磨村（現・

兵庫県神戸市須磨区）の２カ所を許可され、翌文久元（1861）年、陣屋を建設しました。打出陣屋は、阿保親王塚古墳近隣に設置されましたが、文久３年、長州藩は兵庫警衛の任を解かれ、対馬警備にあたることとなります。



慶応３（1867）年11月25日、山田顕義は、長州藩諸隊の指揮役である「諸隊駈引役」として三田尻に集合した長州藩兵とともに船に乗り込み、京阪方面へ向かいました。当初、上陸地を西宮（兵庫県西宮市）と考えていましたが、同所には関東勢歩兵200名が宿泊しているという情報が入ります。このとき、兵庫海岸警備を担当していたのは、小藩ながらも勤王藩として名高い大洲藩（現在の愛媛県大洲市付近の藩）でした。長州藩を陰ながら支援していた大洲藩は、長州藩兵を乗せた船を西宮ではなく打出浜に揚陸させました。

12月１日、長州藩先鋒部隊は兵糧・弾薬予備などを打出陣屋に仮置きし、西宮へ転陣します。８日には京都へ向けて出発し、９日朝、西郷隆盛からの山田顕義宛書簡により、長州藩兵の入京許可と毛利敬親・元徳親子の官位復帰の知らせを受けました。同日、幕府及び摂政・関白の廃止、三職（総裁・議定・参与）の設置などが盛り込まれた王政復古の大号令が発せられます。このように風雲急を告げる京都に乗り込んだ顕義率いる長州藩諸隊は、翌慶応４年１月３日、戊辰戦争の端緒となる鳥羽・伏見の戦いに参加することとなります。

顕義が打出浜に上陸した時点で、長州藩は入京の許可を得ていない、いわば朝敵の軍勢でした。打出滞在中に不測の事態が起こることも想定されましたが、薩摩藩や大洲藩の支援もあり、無事入京を果たしました。また、上陸地の打出は、清風が関わった阿保親王廟改修以降45年間、他の地域よりも長州藩と関わりが強かった地域です。清風や亦介らが関与した長州藩による事業は、打出地域における長州藩の認知度を高めましたが、このことは、幕末に長州藩諸隊が、混乱することなく打出地域で滞在できたことにも一定の役割を果たしたといえるでしょう。

（松原）

〔参考文献〕
「指華入京日載」（『史籍雑纂』五、国書刊行会、明治45年）
『村田清風全集』上・下（山口県教育会、昭和36・38年）
『新修芦屋市史』資料篇２（芦屋市役所、昭和61年）
『兵庫県史　史料編』幕末維新１（兵庫県、平成10年）
岸本覚「長州藩藩祖廟の形成」（『日本史研究』438号、平成11年）
『生誕170年記念特別展　山田顕義と近代日本』（萩博物館、平成26年）

◆「太平洋戦争」下の日本大学第一中学校配属将校



柔剣術大会優勝時の写真（前列右から３人目　今関萬寿治）

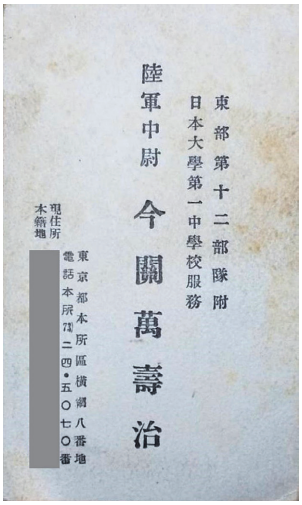
令和５年11月、北海道在住の今関茉莉氏から、日本大学第一中学校（日本大学第一高等学校の前身、以降旧制日大一中）の配属将校だった祖父今関萬壽治について、日本大学には関係する資料・情報などはないかとの問い合わせがありました。一昨年、拙稿「日本大学に勤務した陸軍軍人」（『黌誌』第17号）で配属将校を取り上げましたが、戦時中の付属校の配属将校に関する情報は少なく、資料も見当たらない旨をお伝えしました。

その後、配属将校時代の写真と名刺の画像を送っていただき、同じ写真が加納金助先生伝記編纂委員会編『加納金助先生を偲ぶ』（昭和34年12月刊）の口絵のひとつに掲載されていることが分かりました。加納金助は旧制日大一中創設の中心となった人物で、戦後は日本第一学園（現日本大学第一学園）理事長を務めました。

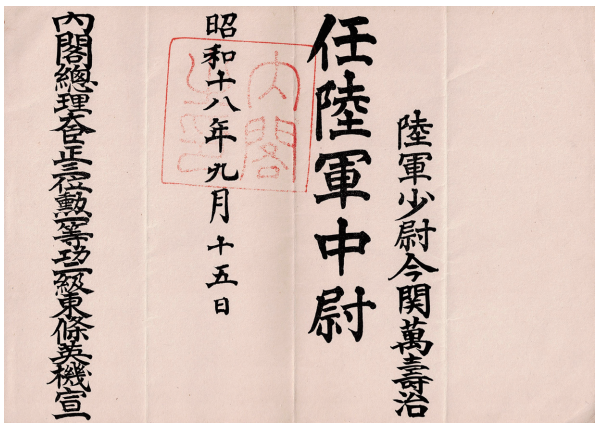
写真のキャプションから、昭和18年夏の日本大学商経科主催の柔剣術大会で旧制日大一中が優勝した際に撮影された事が分かり、前列右から２人目が加納金助（59歳）で、その左が「配属将校今関少尉」と記載されています。萬壽治の名刺には陸軍中尉とありますが、本年４月に茉莉氏の父である今関直人氏（千葉県在住：萬壽治の次男）から画像を送っていただいた辞令では、中尉進級が昭和18年９月15日付となっています。また、明治16（1883）年９月４日生まれの加納がキャプションで59歳となっているので、その直前の７月～８月頃と考えられます。

名刺にある「東部第十二部隊」は、昭和18年９月時点では近衛野砲兵第２聯隊補充隊の秘匿号です。配属将校は基本的に大佐なら師団附、中佐以下なら聯隊附として地域の部隊に籍を置いた上で、〇〇学校服務の肩書で各校に派遣されました。

直人氏によると、萬壽治は木更津中学校卒業後に家業の薪炭売買廻船業を手伝っていましたが、徴集されて入営し、昭和16年11月に陸軍少尉に任官したとのことです。おそらく、甲種幹部候補生からの予備役少尉で、戦時中のため再召集されて服務していたと思われます。戦後は郷里（千葉県袖ケ浦）に戻り食堂や旅館を経営、旅館組合の組合長などもしていたとのことです。



配属将校の名刺



陸軍中尉進級の辞令

また、叔父の今関孝（萬壽治の弟）は昭和28年に日本大学経済学部を卒業、在学中は陸上競技部で走高跳の選手として活躍し（昭和24年の日本インカレ２位）、「日本大学陸上競技部」HPの年表「1951-1960」に、昭和26年の日本インカレ総合優勝の際に旗を持った写真が掲載されていると御教示をいただきました。

文中掲載の写真データの提供および使用許可をいただいた、今関茉莉氏と直人氏には心より御礼申し上げます。

（髙橋）

◆「佐賀の乱」の史跡を巡る

本年は、明治７（1874）年に起こり、山田顕義が参陣した「佐賀の乱」から150年を迎えます。３月、佐賀市内で調査を実施したので、乱の経緯に沿って関連史跡を紹介します。

明治６年、佐賀県下は旱魃など自然災害により米価が高騰し治安が悪化します。県政も混乱し、藩閥政府や中央集権化に反発する上・中級士族層は、政府に抗するための党派を組みます。年末、前司法卿江藤新平を慕い外交政策に対して不満を持つ有志たちは「征韓党」を、７年１月、元秋田県権令島義勇（よしたけ）に共鳴し士族の地位向上や封建制への回帰を望む有志たちは「憂国党」を組織しました。

当初「征韓党」は佐賀城下の延命院、「憂国党」は宝琳院に拠点を置き、次第に反政府的な行動を活発化します。東京から彼らの説得に向かった江藤と島は、結果として反抗の盟主に担ぎ上げられることとなり、両党の協力が合意されました。

明治７年２月16日、騒擾鎮圧に派遣され佐賀城に入った鎮台兵と佐賀軍が戦端を開きます。陸軍少将だった顕義は凶徒鎮圧指揮の全権を与えられた内務卿大久保利通に随行。博多の政府軍本営にあって、同地で募集した福岡県の士族部隊（福岡県貫属隊）を指揮して政府軍主力を援護します。麾下の部隊は、福岡・佐賀県境の三瀬峠などで征韓党の別動隊と攻防を繰りひろげました。

反乱は下級士族や農民層の支持を得られず、２週間で鎮圧され、３月１日、顕義は大久保らと共に佐賀城に入城、宗龍寺に本営を置きました。江藤・島らは捕らえられ、裁判により刑死となりました。（髙橋）



当時の弾痕（佐賀城址鯱の門）

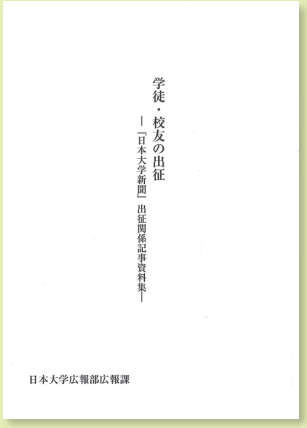


三瀬峠（佐賀市三瀬村）



宗龍寺（同市水ヶ江）

『日本大学新聞』出征関係記事資料集を刊行しました



昨年は、昭和18（1943）年10月21日に神宮外苑競技場で開催された「出陣学徒壮行会」、同年11月17日に小石川後楽園球場で挙行された「日本大学学徒出陣壮行式」から80周年にあたりました。当課では、日本大学出身の学徒兵に関する調査・研究を継続して実施していますが、この節目の時期に、その成果の一つを『学徒・校友の出征―『日本大学新聞』出征関係記事資料集―』（令和６年３月刊）として刊行しました。

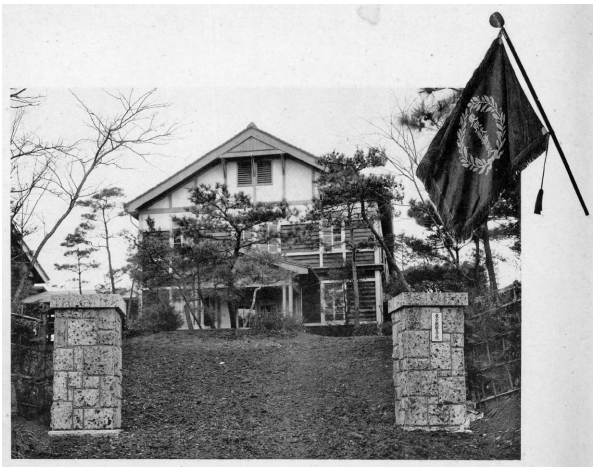
昭和12年の「日中戦争」開始以降、19年１月までの『日本大学新聞』（休刊も含め19年２月から22年９月までの原本は日本大学新聞社に残っていない）に掲載された、出征関係の記事から93件を選び、徴集・召集／志願／戦没・死没／慰霊・追悼などの内容別に分類。巻末には「学徒兵関係記事一覧」として、関係する全見出し423件を収録しました。

なお、この資料集は、校友の須田清様から学徒出陣関係の業務に役立ててほしいとの趣旨で賜った寄付金により刊行に至りました。須田様には心より御礼申し上げます。

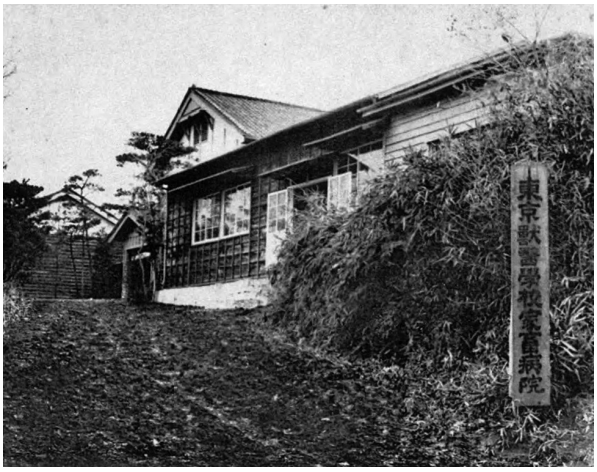
◆昭和初期の東京獣医学校卒業アルバムと冨澤恵

昨年、東京都在住の冨澤康子氏より、祖父の冨澤恵旧蔵の『TOKYO VETERINARY SCHOOL 第二十一回卒業』と題した写真アルバム１点をご寄贈いただきました。“VETERINARY”とは「獣医」、すなわち、「東京獣医学校」のアルバムです。

東京獣医学校は、生物資源科学部獣医学科の前身にあたります。明治40（1907）年創立の獣医師養成機関で、卒業生は無試験で獣医師免許状を取得できました。当初は豊多摩郡渋谷村下渋谷（現在の恵比寿ガーデンプレイス付近）に所在しましたが、関東大震災後の大正13（1924）年に荏原郡駒沢村下馬（現在の三軒茶屋付近）に移転します。この駒沢村下馬の東京獣医学校校地が東京高等獣医学校、東京獣医畜産専門学校、東京獣医畜産大学、さらに本学農獣医学部（東京校舎）へと引き継がれ、現在では三軒茶屋キャンパス（危機管理学部、スポーツ科学部）として使用されています。今回ご寄贈いただいたアルバムからは、貴重な昭和初期の三軒茶屋キャンパスの雰囲気を窺い知ることが出来ます。



東京獣医学校正面と校旗



東京獣医学校家畜病院

アルバムの旧蔵者である冨澤恵は、明治23（1890）年に石川県河北郡七塚村（現在のかほく市）に生まれ、昭和３（1928）年に21期生として東京獣医学校を卒業した人物です。大正15（1926）年に旧「獣医師法」が制定され、従来の「獣医免許規則」が廃止されることが決まり、獣医師を養成していた各校は、新法に対応するため、専門学校令に基づく学校としての認可を受ける必要が生じました。そこで東京獣医学校はカリキュラムや施設を整え、昭和５年に私立として初めて獣医学系の専門学校である東京高等獣医学校となります。冨澤が在学した頃はちょうど獣医師免許をめぐる制度の過渡期にあたり、東京獣医学校時代としての歴史を閉じる直前の卒業生ということになるでしょう。



冨澤　恵

この頃の獣医師は、軍馬の育成や診療に従事する者が多い時代です。政府統計によれば、昭和５年段階で、獣医師の免許を持っていたのは全国で3,955名。同年６月現在の東京の職業別電話帳によれば、冨澤はこの頃にはすでに中野で獣医師を開業していたことが確認できます。電話帳に東京府下在住の「獣医」として掲載されたのは全部で45軒、このうち中野は２軒のみですので、地域にとって貴重な獣医師であったと推察されます。また、冨澤は昭和15（1940）年から22年にかけて獣医師の傍ら中野区議をつとめており、戦後の混乱期にあっては、中野区復興委員の一人として中野区の復興に尽力しました。区議の任期満了後も地域の獣医師として活躍を続けましたが、昭和36（1961）年に肺炎で急逝しました。

このたび貴重な資料をご寄贈いただいた冨澤康子氏に、記して御礼を申し上げます。　（上野平）

【参考文献】
農獣医学部年史編集委員会編『日本大学農獣医学部の歩み』（日本大学農獣医学部、昭和62年）
日本商工通信社編『職業別電話名簿　第20版　甲篇』（日本商工社、昭和５年）
「昭和５年国勢調査」（https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?toukei=00200521&tstat=000001036873）
交詢社編『日本紳士録　47版』（交詢社、昭和19年）
東京都中野区役所編『中野区史』下巻１（東京都中野区役所、昭和19年）
『中野区史』昭和編２（東京都中野区、昭和47年）、同　昭和資料編１（東京都中野区、昭和46年）、同　昭和資料編３（東京都中野区、昭和48年）

◆『国会議員百首』に描かれた山田顕義

明治22（1889）年２月11日に公布された大日本帝国憲法に基づき、翌23年11月に第１回帝国議会が開会しました。学祖・山田顕義はこの帝国議会に貴族院伯爵議員（伯爵位の貴族の中から互選された議員）として出席しました。当初、顕義は次点者扱いでしたが、当選者のうち１名が議員との兼務が不可とされた宮内官、２名が枢密顧問官で「天皇至高の顧問に備りながら貴族院議員を兼ぬるハ仮令法律が之を禁ぜざるも顧問官自身の徳義として」辞退を推奨されたため（『読売新聞』明治23年７月12日号）、繰り上げ当選となりました。

今回紹介する『国会議員百首』は、明治24年12月に出版されたものです。「一首の歌といへとも亦其人の風気性行を知るの材料と為す」として、帝国議会開設当時の議員から百人を選び、これを百人一首に見立てて議員の人となりを表す歌（和歌、漢詩）と絵姿が描かれました。

顕義もこの書に取り上げられたうちの一人です。顕義の歌は「しきしまのやまとにしきのひかりもてえひすのやミを照してそみむ」（敷島の大和　錦の光もて　夷の闇を照らしてぞ見む）。歌の上部の人物紹介に「夙に勤王の志を抱き討幕の事に全力を尽し遂に王政復古の功を樹つ」「西南の役に従軍し砲烟剣華の裡に駆馳して偉大の功を奏し」「司法大臣に任し大に司法制度を整ふ」とあるように、軍人・法典伯として活躍し、日本の近代化に寄与した顕義をよく表した歌といえるでしょう。この頃には断髪し洋装であった顕義が、本書ではあえて総髪・継裃（つぎかみしも）姿で描かれているのも興味深いところです。

なお、顕義はこの『国会議員百首』が出された約１か月後、明治25年１月28日に枢密顧問官に任命されます。そのため、前例に則り同年４月１日に貴族院議員を辞職しました。（上野平）



『国会議員百首』山田顕義の項


明治20年代の山田顕義

活　動　報　告

令和６年１月～令和６年６月
（大学史に関する活動）

〇調査・研究

１月25日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会に参加（ＮＨＫ放送博物館）
２月７日～９日	創立者平島及平及び学祖山田顕義関係資料調査（熊本県熊本市）
２月20日～22日	本学校友、教員及び学祖山田顕義関係資料調査（兵庫県神戸市、高砂市、芦屋市）
３月12日～13日	学祖山田顕義及び創立者長森藤吉郎関係資料調査（佐賀県佐賀市）
３月14日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会に参加（大東文化大学）
４月20日	小藤田正夫氏への神田資料聞き取り調査（千葉県柏市）
４月25日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会に参加（中央大学多摩キャンパス）
５月15日～16日	学祖山田顕義及び有栖川宮関係資料調査（岐阜県岐阜市）
５月20日・27日	学祖山田顕義関係資料調査（東京都立中央図書館）
６月４日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・総会に参加（中央大学多摩キャンパス）
６月５日	全史料協関東部会総会・記念講演会に参加（武蔵野スイングホール）

〇展示

１月５日～３月31日	山田顕義が受けた教育　―学祖山田顕義生誕180年記念―
４月１日～７月15日	近代陸軍創設期の山田顕義

〇研修・講演

５月９日	スポーツ科学部　大学史講演
５月９日	鶴ヶ丘高等学校　学祖講演
６月29日	横須賀桜門会総会　大学史講演

本号より、紙での印刷が廃止となり、データのみの配信となりました。今後も継続して大学史に関わるニュースをお伝えしていきます。

本誌の内容および日本大学の大学史に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

日本大学広報部広報課（大学史）
mail : nuhistory@niihon-u.ac.jp

日本大学大学史ニュース
第27号
令和６年７月31日
編集・発行　日本大学広報部広報課（大学史）
〒102-8275　東京都千代田区九段南４-８-24
TEL 03-5275-8444